

説苑

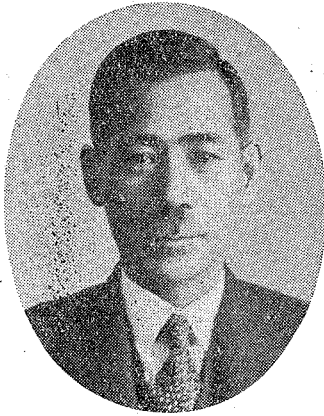


内務技監の今昔（六）

|| 辰馬 鎌藏氏 ||

清水生

辰馬氏と白鷹の關係



昭和十一年十一月七日當時卷間において屢々噂さのあつた内務省内の土木局技術首脳部には大變動があつた。夫れによると内務技術部の最高地位である技監の職には前記した青山士氏が勇退されて内務省東京土木出張所長であつた。辰馬鎌藏氏が昇進して、技監の地位に据つたのである。顧るにその當時勇退せられた所謂勇退組は青山技監を筆頭に木津横濱、福田仙臺、牧野下關、の各土木出張所長と物部土木試験所長の五人であつて、榮轉組は辰馬氏の技監となつたのを始めとして佐藤、谷口、春木、田淵、算、三浦、藤本の各技師連であつた。そこで辰馬氏の略歴

を見る。

辰馬氏は明治十五年二月に兵庫縣武庫郡大社村に生れてゐる。全體辰馬家は分家であるが、その本家は所謂攝津灘の酒造家としてあの有名なる白鹿の本舗辰馬吉左衛門氏であり、現在の辰馬汽船會社は最初辰馬家が自家醸造の酒を東京に送るに他の輸送會社の力を藉らずして、自からの船舶にて輸送してゐたのが、漸次發達せしめて辰馬汽船會社となつたことであるが、本家はかやうな大資産家である。分家の辰馬悅藏氏もこれ亦醸造家であつて、北店と稱して好酒家には持てはやされる。白鷹は、この分家の醸造するところである。而して辰馬鎌藏氏はこの分家に屬してゐる。氏は漸次中學、高等學校と正規の階段を経て明治四十年七月十日に京都帝國大學理工科を優秀なる成績で卒業して居る。

内務省技術部に入る

氏は始めて官界に入り内務技師として大阪土木出張所勤務となつたのは明治四十二年二月十日であつたが、其

後同四十四年四月十一日には下關土木出張所に轉勤を命ぜられて同所に勤務してゐる、同年五月八日陸軍工兵少尉となつてゐるが、更に大正五年二月二十四日に東京土木出張所の勤務となつて同土木出張所管轄内の各土木技術事務所に精勤して居つたが、昭和三年四月三十日に至つて名古屋土木出張所長に昇進してゐる。更に同九年には東京土木出張所長に榮轉して利根の治水工事等を統轄してゐたが、前記の如く昭和十一年一月七日に前内務技監である青山士氏引退のあとを承け續いで内務技監の位置についたのである。而して氏は技監在職中は約三ヶ年であつて昭和十四年六月六日に谷口三郎氏と代つて勇退したのである。内務省を去つた後ちの氏は滿洲國の囑託として大東港大都市の建設都市計畫水道及び道路の施設計畫殊に港灣問題に關與し、また、陸軍省交通本部囑託、廣島縣、市顧問東京水道顧問、内務省土木會議委員、興亞院技術委員、内務省防空局參與道路改良會理事等幾多の公職に關與してゐる。

これが大體辰馬氏の官歴と云ふか兎に角氏は京都帝大を出で以來進んだ経路である。

辰馬氏と語る

そこで筆者は敬友平井洸民君の紹介状を貰つて某日氏を澁谷なる第一高等學校附近の邸を訪ふたのである。筆者の訪問趣旨は云ふまでもなく本號の題目にあるが如く氏の技監當時の懷舊談でも聞くつもりである。玄關で取次の人に紹介状と筆者の名刺とをわたして來意を告げると早速瀟洒る和室に洋家具を配した應接間に通ふされた。初對面の挨拶がすむと筆者は早速……あなたの技監時代について……と辰馬氏は、

左様……私が昭和十年頃かと覺えますが、當時はまだ東京の土木出張所長時代であつたが、土木工事についてはあの大利根の増補工事の計畫をなしてこれを各關係先輩各位に圖つてその案の種々検討をなして、これがもととなつて技監になつた時に丁度この大工事の豫算も通過して漸く實が結んだやうな始末でした。

と利根の増補計畫等について縷々語られたが、更に言葉を〇す。

大阪の淀川増補工事もまた、關門の隧道工事の豫算も私の技監のときに内務省の會議で通過したのであつた。と述べられたが、更に。

私の技監當時に淀川の河川統制をやつた結果に依つて、東京市は非常に水に困つて居るので、東京市上水道の一部にこれを應用して出來たか、その計畫を私がやつたこともある。

と氏は東京市の水道と河川統制について述べて、更に。

私の技監當時には技術者の大陸進出について非常に澤山の人々を揆定して送つたのであつた、即ち北支では建設總署が出來て北支の開発……土木事業を盛んにやることになつたので、三浦技師を始め第一、第二、第三の三回に互つて派遣技術員を選して、いろいろ努力致しましたが、ターク築港事業に對しても元大阪土木出張所長の高西博士以下數十名の技術者を大陸に送つたこともあつ

た。

とこゝで氏は大陸と技術について力を致したことを語つたあとについで。

中支方面でも上海の恒産會社にも名古屋土木出張所の金子中島兩技師を筆頭に大陸派遣技術者の人選に苦心してこれが一應終了したので私はこれを機會に技監の職を引退したのであつた。

と、この時筆者は氏の道路に關する所見を求めたところ氏は。

我國の道路の所見

全體我國の道路は近年に至つて比較的整備もされ、また舗装も行き渡つて所謂改良されてゐるやうではあるが、併乍ら克々検討すれば一貫した計畫……大道路と云ふやうなものはない。これを獨逸の彼のヒツトラ一道路に比らぶればまだ、我國の道路は幼稚極まるものであつて、成程都會の附近には相當立派な道路が出來てゐるが、偕てこれから名古屋に飛んで行かうとすれば

先行が悪い、少くとも東京から下關まで位は一貫したる大道路がなければならぬ、鐵道は鐵道の使命を持ち道路はまた道路の重大なる使命があるから、これに併立して行かなければならぬ。聞くところによると、最近大阪名古屋間に貫通する大道路建設の計畫であるとのことであるが、關門隧道の完成も追々迎へて來るから東京下關間位は差當りこの幹線の日本縦貫線道路をやらねばいかん。と私は平素から常々これを遺憾のことと思ふてゐる。

云々と語られたのであつた氏の我國の道路に對する所見は筆者との極く僅かなる會見時間中に於てホンソその一端を漏らされたのに過ぎないが、筆者も亦全然同感である。議論を抜きにして、大東亞共榮圈の建設は我國が中核體とならなければならぬ現勢に於て我國には未だ一貫したる所謂大道路のないことは將來大東亞を聯絡する殖産興業……經濟發達上更に國防上等各角度からの見地よりしても誠に遺憾至極である。ヒツトラ一總統の意志に基くドット博

士の道路建設の熱意殆んど一身を獨逸の道路網の確立とその建設に捧げた結果、あの獨逸の道路……さては敵國ながらも米國の左右縱横に聯絡するあの立派なる道路建設……改良を思へば世界一流國を以て自任し又列國もこれを認め居る我國に於て道路問題は決して等閑に付すべき問題ではない益々時局に策應して對所せねばならないのを序いで強調して置きたいのである。

土木技術者と海外進展

辰馬氏は筆者との會見の際にも我が土木技術者の海外進展について語られて居るが、氏は或る講演會に於て、

徳川幕府倒れて王政復古、明治維新の世となるや、文明開化の聲は津々浦々まで響き渡り歐米文化は澎湃として怒濤の押寄する勢に移入し來たのである。今日我國が東亞の盟主となり現代の隆盛を見るに至つたのは五箇條の御誓文により未曾有の大變革をなさんと誓ひ給ひし明治大帝の偉大なる御聖徳によるものである。

と冒頭して。新舊思想の相拮抗して恰も世相紛亂の所謂混

沌の時代に能く上下一致して泰西文化の長を執つて文明の心蓋を吸収して以て開化に向つて邁進した不屈不撓の努力の結果であると斷じた後ち。

土木技術に於ても測量、鐵道、港灣、河川、砂防、水道等の學術指導者として工部大學、舊開成校、南校及札幌學校等に教師として招聘せられたる十數人、土木專業の計畫及施工の指導監督者として内務省鐵道關係及北海道廳等に雇工師又は雇技師として招聘せしもの五十餘人の多數に及んだのである。

とて、我土木技術の歐米の夫れに遜色なく進歩し來つたのはこれ等招聘外人の博愛指導力に負ふところ多大であるが又他面に於ては諸先輩の技術に對する理解ある愛着心と卓越せる頭腦と切磋琢磨の奮勵努力によるものなることを説き、更に論旨を進めて。

然るに今日に於ては此等外人の力を待たず啓發によらず我國獨自の力により土木專業を計畫し、實施し其の効果を擧げつゝあることは快心の至りに堪へざるものであ

る。然はあれ、土木技術の進歩の向上は多年の経験と孜孜として倦まざる研究の力によるものにして此點に於ては我國土木技術の研究は先進國に比較し日尙淺きの憾みあるのである。其上今後に於ける土木技術の舞臺は内地に止らず、外地に於て日本技術者の手腕を發揮すべき場合多くの外人により批判せらるゝ國際的性質を帯び凡に於ては層一層常に倦まず撓まざる切々たる研鑽力を以て更に一般の向上進歩する覺悟と堅き決心を要すると思ふのである。

海外進出の我が技術者の狀況

と我國技術者の一層の向上進歩を促がして。次に海外に進出せる技術者の狀況に移つた。

アフガニスタン國の招聘に應じて内務省より三人の技術者を派遣したのであるが、此の技術者は同國の道路、橋梁、建築、都市計畫、水路、堰堤等の調査設計に従事し、此の設計の或るものは實施せられて居るのであるが、實施中の一例を舉ぐれば三萬町歩及六萬町歩の綿作

耕地の灌漑用水工事で毎日二千人又は四千人の工夫を使役せる彼國に於て重要なる大土木工事であつた。此の工事は以前獨逸人技師の設計になり其の指導により着手せられたのであるが、失敗に歸したのである。我技術者の手に移るや着々成功し好成績を擧げてゐる、アフガニスタン國政府は是非共邦人技術者の手により完成せられたしとの強き要望があつたのである。

次に泰國に移つて。

「昭和十三年」泰國バンコック港の修築計畫案募集に我國も參加し、英、米、獨、佛、伊、等より應募した二十二案中で我國の案が第一位獲得の名譽を得たのに徴しても、我國土木技術が今日「昭和十四年」に於て先進國に比較し何等遜色を見ず、寧ろ優秀を示す一つの證據であるとの意を強くして居る次第である。

と我國技術は最早や斷然先進國に劣らぬのみか、却てその水準を突破してゐることを述べて。

滿州國に於ては創國以來多數吾々同僚技術者が滿州國

官吏として又會社員として進出し國都建設都市計畫事業
鐵道道路の交通事業、資源開發事業、河川の治水事業及
水力發電事業等の滿州國發展の基礎をなす土木事業が何
れも其の軌道に乗り來れるは奮勵努力の賜にして我國の
發展と滿州國の發展とは密接不可分にある關係上慶賀の
至りである。

と滿州國の發展は畢竟本邦技術員の努力の結果なりと云つ
て更に北支及中支の狀況に及んで。

聖戰目的達成の要素

北支及中支に於ては戰地第一線に於て治安維持工作に
於て又將來の經濟文化工作に於て軍人と共に生命を抛ち
吾々の同僚技術者が夫々活動せることは云ふまでもない
が、今次事變前及事變中には滿洲國、支那臨時政府、中
支、蒙疆、アフガニスタン國、シヤム國等の方面に軍屬
託、軍屬、官吏、會社員及雇技術者等として内務省及内
務省關係鐵道省及鐵道省關係より派遣せし或は招聘せら
れし技術員の概數は二千數百名に及び技師級以上は二百

餘名の多きに達して居るのである。之を明治初年よりの
外人招聘數五十餘名と比較し對照すると、所謂今昔の感
深きものがあるのである。又今次の事變は日清日露の戰役
と異なり戰爭終結するも聖戰の成果を收むるためには建
設工事文化工作は長期に亙つて行はる可く、土木工事は
此等の基礎工事として先づ第一に着手せられ、此の成否
が従つて聖戰目的達成の要素であることからして此の任
に當る技術者の使命は重且つ大なりと云はなければなら
ぬ。と説いて更に轉じて。

昭和十三年の現職技術者の概數

土木學會に於て調査した昭和十三年八月現在の現職技
術者の概數は約二萬七千餘人であつて、大學出身約千五
百餘人、専門學校出身約五千五百人、普通學校出身約二
萬餘人で之を専門部にすると鐵道關係約七千二百餘人、
道路關係約六千百餘人、河川砂防關係二千五百餘人、港
灣關係約八百三十餘人、上下水道關係約二千二百餘人、
都市計畫關係約八百二十餘人、發電水力關係約二千餘人、

其の他五千七百餘人であつて、此の概數に對して約一割に近い人が今次事變前及事變中に大陸に進出して活動して居るのである、土木技術者が土木報國の實績を擧げて居ることを示すものであり、誠に喜ばしき限りである。と昭和十三年に於ける土木技術者の概數と海外進出の比準を擧げて。

如斯く土木技術者の進出が目覺ましく喜ばしきことではあるが、此の結果内地に於ける技術者の不足を告げて來たのである。内地事業、基より等閑に附することは出來ないのである。然し大陸政策は我國將來の飛躍發展上より國是として之を取り扱はなければならぬのみならず又技術者に取りては此の國是に従ひ技術者發展の新天地を拓き技術者の重用を實行する機運を逃してはならないのである。内地に於ては當然技術者が占むべき地位で容易に興へられざる地位が外地に於ては容易に得られ、而も支障なく好成績を擧げ技術者重用の實績を示して居る狀況を深く考へなければならぬ。此際技術者の進出に對

しては我國將來の大陸政策上の見地よりして將來技術者發展及重用の礎石となるのであると思ひ、又或は日滿支提携親善の楔子となるべきを思ひ積極的に相協力して援助する覺悟と決心を準備すべきではないかと思ふのである。又此の際技術者の缺乏に對しては技術者總動員的に考へ適材適所に相當年輩の健康者をも働いて貰ふと云ふ様に考へなければならぬと思ふのである。云々。

と辰馬氏は講演してゐる。氏は我國の技術者とその技術の海外進出については搖籃時代にもまた、其後に於ても非常に努力した關係上は偕て措いて氏の平素抱懐せるところは技術に依つて、日滿支提携、日滿支の親善を益々計り以て資源開發の基礎である大陸土木事業を我國の優秀なる技術と結び付けて大陸に進出せしめ以てその目的を達成せんとするの意圖を強く抱いてゐるやうである。

東亞經濟建設と技術の必要

今や米英の舊秩序の大憲章である九ヶ國條約は大東亞戰の發生によつて名實共に消滅し去つたのである。我國は彼

等の執拗獨善的なる壓迫を押し返して以て自主獨往の新天地を拓かんとしてゐる。これには戰爭完遂のための軍備充實については今更梨説するまでもないことであるが特に大東亞戰爭が長期戦であればあるほど、米英の軍備充實に對抗して彼等を徹底的に壊滅せしむるに必要な軍備の完成は絶對的條件たることは勿論生産力の擴充は軍備の充實にもまた國民生活の確保にも關係するところ至大であると共に戰時經濟の中核をなしてゐる。彼のルーデンドルフ將軍の喝破したる如く近代戦は國家總力戦であり、又長期戦である。故に國家の總力を長期間に互つて維持するためには經濟的には生産力を維持増強すること夫れ自體が最も緊要事である。されば近代戦にあつては單に軍事的に消費される巨大なる物資を補給するの必要のみならず、軍需物資の生産手段を増強して國民生活必需物資の生産にも努めなくてはならないのである。……大東亞戰爭は一面に於ては滿支及び南方の建設を遂行するのであるから、このために相當多くの資材等を必要とすることは勿論、延いては生産力の

飛躍的増大が全般的に要求されるのである。この要求を滿たすことが戰爭完遂の道程である故に將來茲に國內不足の重要物資は滿支からの輸入に重點が置かれると共に更に南方占領地も亦その供給力の一大源泉である。果して然りとすれば、こゝに東亞の指導的立場にある我國は、滿支及び南方地帯の資源開發促進に今後共大いに一層の努力を致さねばならぬは云ふまでもない。然してこれが所謂大東亞共榮圈内の一段と經濟的提携を深める意味にもなるのであつて従つて、これが基礎的には共榮圈内に於ける各種土木事業の遂行を必要とするのである。こゝに所謂我が技術界は達觀してこれが對應策を確立するの必要がある。幸にして辰馬氏の如き具眼の技術者は夙にこゝに着眼して既にこれが實行に努力しまた努力しつゝあることは大に吾人の意を強くする次第である。

氏の技監當時の土木局首腦の人々

偕て辰馬氏の技監當時に於ける内務土木局の主なる人々の顔觸れを見ると現在海軍の司政長官である岡田文秀氏が

土木局長であり、其のあとに赤松小寅、安藤狂四郎、挾間茂の諸氏が土木局長として順次代つて居るが大體に於いて、道路課長に河部邦一、河川課長に新居善太郎、港灣課長に石井政一、第一技術課長に現技監である鈴木雅次第二

技術課長に佐藤利恭の各氏が夫々各擔任課を管轄して更に道路課には近藤欣一、細田徳壽、谷口松雄の各事務官をまた河川課には澤重民、橋本甚四郎、安田正鷹の各事務官を港灣課には嵯峨根達雄事務官を夫々配置して我國土木行政の堅陣を布き加ふに内務土木試験所長として藤井眞透、東京土木出張所長として後ちに辰馬氏昇進のあとを襲ふて内務技監となつた谷口三郎、横濱土木出張所長として春木節郎、仙臺土木出張所長として田淵壽郎、新潟土木出張所長として伊藤百世、名古屋土木出張所長として金古久吉、大阪土木出張所長として高西敬義、神戸土木出張所長として寛斌治、下關土木出張所長として三浦七郎の淨々たる技術者が責任を以て異々其の管内に於ける治水其他の所謂土木行政事業の任に當つてゐたのであつた。而して氏が技監在

職中の主なる仕事については氏が曩に筆者と會見の際にも語られたやうに利根と淀の増補と關門隧道と我が技術者の大陸進出に關聯すること等である。

利根と淀の増補

而してこれを大略的に見ると利根の方は、あの昭和十年の大洪水によつて阪東太郎の全川はその根本的改修の基準であつた、水位並に流量を遙かに超越して大堤防が至る所で漏れ崩壊が相次いで起つて實に危機に瀕したのであつたが、當時官民擧げて一致協力して防水に死力を盡したので辛じて利根本堤の決壊は免かれるを得たが、支流小貝川の破堤のために約一萬二千町歩の耕地と多數の宅地が浸水して莫大の損害を蒙り、また水源地方と江戸川と利根運河沿岸は甚大の損害を受けたのである、この際萬一にも利根の本流または江戸川の本堤の一部でも決壊することがあつたなればその損害は實に數億圓に達するのでこれを鑑みて氏の技監時代に應急工事を施行すると共に根本的なる對策の調査計畫に努めて漸く八千六百餘萬圓の所要經費豫算が認

められて第一期工事として四千八百餘萬圓を以て十四年から増補することになつたのである。淀の増補は氏は技監就任の以前からも約十六年の永きに亙つて増補工事を施行して來たのであつたが、歲月の経過につれて風雨の作用其他各種の事情のために堤體の衰瘠が甚だしくなつて來ると共に、河口附近の地盤の沈下等が一層著しくなつて下流部堤防の大半は既に沈下一米にも達して、これがため洗堰閘門扉の作用が不能になるやうになり、全く等閑することが出來ないので、氏の技監在職中にこれが修補計畫を樹て、第一期工事として右岸高槻以下の工事に著手することゝしたのである。この修補の効果について筆者の他から聞いたところによると。

大阪市は我國の商工業の中樞たるところであるから従つて淀川の洪水氾濫を防止するのは敢て地方的利益だけではなく國運の進展に資するところは大きいのみならず、このために北河内三島の廣き耕宅地の大部分の水災が防止されるから農村振興に大いに役立つのである更に

淀兩岸に於ける國有鐵道軌道道路の交通が確保されると共に下流部に於ける閘門の改造は商工都市の水運の改善に大に役立つ。

と、のことであるが、その通りであると思はれる。

道路と關門隧道について

また氏の技監在職中に始めて關門間の直接連絡施設としての隧道を開鑿するために豫め其の地質其他を實地調査するに要する經費が生れてゐる。即ちこれによつて關門隧道の仕事は始めて頭を出して具體的になつたと云ふてよいのである。また道路關係ではこれは政府の財政の都合に依つてその通りの實現を見なかつたが最初國費總額一億九千餘萬圓を計上して彼の第二次道路改良策の實行策として産業振興道路改良五ヶ年計畫を樹立してゐる。勿論これは氏が定めたと云ふ譯けでもなく時の内相であつた。潮惠之輔氏の下に次官に現内相である湯澤三千男氏が居り、また土木局長には岡田文秀氏等が居つて時の政府の方針に則つてやつたのに過ぎないと思はれるが、勿論これには技術的方

面から内務技術部の最高地位に居つた。氏もまた参加してゐたのであらう。この産業振興道路改良五ヶ年計畫については筆者は前にも一寸と書いたことがあるから多少重複する嫌はあるが、本誌の性質上この計畫の目的は何んであつたかを略記すると。

全國を通じて自動車運輸の低廉且つ迅速で苟も安全を圖る意圖の下に生産配給販賣等の諸經費の低減を促し以て各種の産業貿易の基礎的條件を改善すると共に一朝有事の際には動員の迅速を確保するのが目的のやうであつた。夫れ故に國道及び指定府縣全線を通じて、これに適應するやうに全國の産業上極要なる地點を連絡する區間を撰定してこれを一體として改良工事を施すのにあつた。然るにこの計畫は前記の如く政府の財政上の關係に於てその實行が計畫に伴はないで仕舞つたのである。これには筆者も我國の産業及び貿易の振興上殊に現在の時局に鑑みて道路政策上誠に遺憾であると痛感するのである。

氏と江戸川水利統制

説苑

辰馬氏は東京土木出張所長の時代に初めて江戸川の水利用統制といふことをやつてゐるがこれに關して氏は。

國運の進展に伴ひて河水の利用は益々多岐多端となつて且複雑化するに至つたのである。而して水利の種類を見るに往昔にあつては灌漑を主とし、之に水運及少許の上水道並に動力として、水車を廻轉するに過ぎなかつたが、近時に至つては灌漑及水運の外發電、上水、工業用或は都市淨化用として普く使用するの現状にある。然るに河川の水量は自ら限度あるを以て、如何に多量の河水を要求しても現状の儘に於ては其要求の一半をも満足せしめることが出来ないのみならず、尙現在に於てさへ河水の利用者は各自排他的獨占的にして所謂我田引水の傾向あるを以て利用上遺憾なる状態にある。然れ共現在の如く河水が各種水利經濟の對象たる以上之を統制して公正に河水を配分し、其利用をして最大限度迄に増進せしめ以て國家産業の健全なる發達に資する要がある。とて河水統制の必要を述べて。

この目的を達成するに當つては周密なる調査を基礎として確固たる計畫を樹立し之が實施を促進せしむるを要するのである。水利を統制したる實例としては、猪苗代湖、黒部川、關川其他の河川に於て其例尠くないが、特に都市附近の河川に於て統制を緊要と共に焦眉の急に迫れるのである。江戸川に於ては現在一八・八四立方米の河水を引用せるも近年屢々起る濁水のために之を安全自由に取水する事が出来ないで、年と共に其利用を減殺せらるゝ現状にある。然れ共も統制計畫を實施するに於ては現在以上の水量を利用し得るのであつて其曉は現在水利を改善し尙將來の水利を開發し施設後の上水道建設に於て直ちに二千二百五十餘萬圓を節約すると共に灌漑及水運に於て毎年百萬圓の利益を齎らす事を認めたのであると、江戸川統制の必要を強唱して、その水利統制計畫に入らう。

江戸川の統制計畫

本計畫を立つるに當て如何なる濁水位及其流量を標準

とするかは重要な問題であるが、各濁水位及流量の内、最低濁水位即ち昭和八年七月の如き記録的のものは持續時間僅かに十九時間に過ぎざるを以て之を除外するに至當と認め、次に約五ヶ年に一回位起る程度の非常濁水位及び之に對する流量を採つて計畫することを最も適當と信じたのである。この非常濁水位は流頭關橋に於て三八・〇立方米「一・三六四個」なれ共、利根運河より二・〇立方米の流入あるを以て總流量は四〇・〇立方米「一・四三六」である。然るに現在の取水量は二一・一五六「七六〇個」なるを以て、殘餘一八・八四四「六七六個」は東京灣に放流しつゝある。如斯多量の餘剰水量を放流に任せずして、之が利用の方法を講ずると非常に利益がある。現在「昭和十年」江戸川に何等の施設がない現状に於ては其利用は到底不可能である。

とて、その施設として、水門及閘門、放水路、河床整理、及床固補修、水路附替、附帶工事、施設後の取水量の諸計畫を樹てたことを云つて、更にその效果に及んで現在水利を改

善し得る利益、即ち灌漑、上水、工業用水等を詳細に述べて尙ほ將來の水利を開發し得る利益、及び將來餘剰水量を利用する場合の利益、航運を發達せしめ得る利益排水及び水産物に及ぼす影響並に江戸川洪水位に及ぼす影響等各般に互つて述べて、この江戸川水利統制計畫中に氏は技術的意見を吐露してゐる。これを見ても辰馬氏の土木技術に對する識見の一端が窺はれるのである。

辰馬氏と一所に仕事をする

そこで筆者は多年辰馬氏と親交ある眞田博士を秋季皇靈祭の佳日に大森山王の博士自邸に訪ふて博士の見る所謂辰馬氏觀とでも云ふやうなことを聞いてみた。筆者を心良く引見された眞田博士は、

辰馬氏は明治四十年に京都帝大を出て内務省に入られたのであるが、最初は確か淀川第三工區であつた石山事務所に配屬して居たやうに記憶する、その時の所長は沖野博士でこゝに數年勤務して居たのであつたか、私はその時に第二工區の主任をして居つたが辰馬氏は未だ入つ

て間がないので自然技師にはなつてゐなかつたらう。と眞田博士は當時のことを細に話されたあとに次いで。

氏は夫れから確か明治三十九年に當時はやはり大阪土木出張所の所管となつてゐた、九州遠賀川の改修工事に轉任されて、川口の蘆屋の工場主任となつて數年間仕事をして居つたか、この遠賀川の改修工事は大體すんだので、私は利根川改修に居つたので丁度平井技師が青森築港に轉じたので、私は沖野技師に辰馬氏を私の方へ貰らいたいと申出たら、沖野技師は原田下關所長にその旨を云つてやつた。辰馬技師を利根の方へ割愛するやうにとの手紙を出したから原田所長も承諾して辰馬氏が利根川の改修工事の方に来てくれた次第であつた。而して當時私の仕事は田中工區といつて、大變僻地で豆腐屋一軒もなく、従つて電燈はなく、ランプでやるやうなところで改修工區中全國に稀れる僻地であつたか、こゝで私等は氏と共に仕事をしたのであつた。

と博士は當時を回顧されて、買物に東京に氏の御奥サンが

買物に行くにも驛までは共に工事用のランチに乗つて行つたことや、當時博士は一軒家の宿に居たが、辰馬氏は田舎の三軒の内その一軒に住つて居たこと等で自然家庭的にも懇親であつたと縷々と語られて。

木曾川改修で骨折

話は横道に入るが當時は總て現場の設備は實に蠻的のもので、腰掛けの事務所は出来てゐたが公舎もなく、工夫の住家等、少し建てゝ貰らいたいと技監に申出たところ

沖野技監はヨイと云はれん反對でもなく亦近藤所長も「大正元年のこと」強いて反對もせないがこれに付いて後援もせない有様で、當時池田宏氏が内務書記官であつたが、先例はどうかと云つて却て實現しそうもなかつた、結局五六軒の工夫合宿所が出来た位であつた……全體利根川の改修は日本始まつて以來ない大工事であつたが、氏はこゝでも亦數年間私の仕事を援助してくれたのであつた。

と話されて。

其後氏は多摩川改修工事が始まつたので初代の主任技師として行かれたが、該工事も略ぼ目鼻が付いたので、更に荒川改修の主任に轉じて夫れから名古屋の土木出張所長となつたのであるが、名古屋には難物の木曾川改修問題で水利關係等を地方的利害關係から複雑して居るのを纏めるには相當困難であり、亦氏は骨を折つたが水路の改良も出来たやうであつた。

こゝで筆者は博士に率直に辰馬氏の技術的觀察は如何ですかと尋ねると、博士は、

氏は研究することはあまり得意ではないかも知れんが、ものを纏めて作ることは實に秀でて居る、衆を率いて人々にやらせることは氏の大變長所であると思ふと云はれて、

氏は河川の仕事には永らく携はつてやつて居たから非常に經驗もあり亦識見もあつて精通されて居る。勿論道路の如きも名古屋で國道をやつて居られるから相當克く判られて居るが、築港工事は實地にやられたことはない

やうに思はれるがこれも亦相當に識見があつた。まあ兎も角事務技術は一通りやられるが、現在では技術界の先輩で殊に河川については造詣が深い。

と語られて、最後に趣味の方面はと……。

辰馬氏は謡曲はすきで多摩川時代ではまたお奥サンも長唄や謡曲を共にやられてゐた。

と云はれたが、最後に博士は辰馬氏の人となりについて、人なつかしい人で所謂人にすかれる人である。また何等氣どるやうなところは聊もなく、よい意味に於て遠慮をせない人で陰險とか懸引とか云ふが如きことは微塵もない。所謂一言にして云へば立派な人であると語られが、勿論この博士の談にして誤あれば筆者の誤りであることは斷つて置くのである。これが大體眞田博士の辰馬氏に就いての諸話であるが、筆者もまた、初対面ではあるが、眞田博士の語られたのと全然同じ感じをなしたが、氏は温厚徳實にして我が土木技術界に重きをなして所謂立派な人であると云ふて可なりと信ずるのであると一言して秃筆をすることにする。

若葉吟社詠草

大らけく梢晴れたり眼白押	落
何時までも寝惜む父や別れ蚊帳	同
風をうけて萩咲く窓や秋立てる	同
遅しく低能兒肥ゆ秋立ちちて	同
棟高く鶏頭咲けり大藁家	同
讀み呆けし眼にかまつかの色強く	同
征く身にも蚊帳の別れの身にしみて	同
筑波根のよく晴れてあり葉鶏頭	同
機の音燈籠の灯も入りにけり	同
出征の朝鶏頭の静かなり	浅
澄む空に友と散歩や秋立ちちて	翠
室廣う蚊帳に別るゝ今宵かな	静
○	如
水石の艶けき色や今朝の秋	野
秋立や燈臺守りの一家族	同
楡にからむ抜け毛わびしも秋の立つ	同
	狐
	禪
	山
	茅
	風